



タッチング パロット

Touching Parrots [2015 年 6 月 30 日]

著者・イラスト : Shauna Roberts

日本語訳 : 柴田 祐未子

私たちの多くは鳥さんを撫でてはいけない、鳥さんのここを触っちゃいけない、そこを触っちゃいけないと言われてきたのではないのでしょうか。では私たちはどうしたらいいのでしょうか。何をしてはいけないかについて話すのではなく、鳥と私たちの暮らしを豊かにするために鳥に触れたり、鳥を撫でたりする代わりに、より強い絆を築くために私たちにできることについて話しましょう。

まず、私たちが鳥の視点から学ぶことについてみていきましょう。お互いに羽繕いをし合う行為は全ての鳥にとって明確な社会的機能を果たしています。ある野生の鳥（インコ・オウム以外）では、仲間間で喧嘩が勃発した後にお互いに羽繕いをします。鳥同士のケンカが激しければ激しいほどより入念に、特に敗者によって羽繕いをするのは、ケンカによるストレスからかもしれません。本当の気持ちは誰にもわかりませんが、このお互いに羽繕いをし合う行為は頭の羽根ではなく身体部分の羽根になります。

相互に羽繕いをし合う行為はまた、巣穴のようなテリトリーを侵害した小競り合いの後にもみられる場合があります。小競り合いの後に、たいてい木と一緒にとまってお互いを羽繕いしているところが観られます。

また、鳥がお互いに軽く触れあう様子も見られることがありますが、これは私たちが物事が大丈夫であることを誰かに再確認する仕草と似ています。鳥に関しては、この仕草はペアの間で、あるいは自分の子供に対してのみより多く見られる行動です。

お互いを羽繕いし合う行動は、鳥のように群れで暮らす種類によくみられます。他の鳥に羽繕いをしてもらう利点は、自分では届かない頭の羽根の鞘（さや）をほぐすだけでなく、パートナーにダニなどの様々な虫をチェックしてもらうのに役立ちます。お互いを羽繕いし合う行動は、野生の鳥において寄生虫やダニを取り除くことに大いに役立っていると知られています。

また、お互いに羽繕いし合う行動は鳥の間では求愛にも使われています。交尾をする前に、クチバシをパートナーの翼や身体にそって走らせます。

どこを、どうやって、そしていつ、私たちは鳥たちに触れるべきなのでしょう？ その答

えは部分的には個々の鳥によりますし、家庭やケージ、飼い主などそれぞれに異なるので、各家庭の環境にもよることになります。一般的には、私たちが鳥を羽繕いしてあげたい場所は頭の上ではないでしょうか。頭の羽根を羽繕いしてあげるのは問題ありませんし、ほとんどの場合は受け入れてもらえるでしょうがいつもとは限りません。オスの白色オウムは特にカキカキしてもらう気分ではない時期があり、私たちは鳥からの羽繕いの要求に対してしっかりと注意を払い、場合によっては出直す必要があります。頭を横に動かすことで人の手から遠ざかるか、はたまた、頭を下げたまま、あるいは自分(=鳥)の足を首元でモミモミと動かす鳥のボディランゲージに現れます。(継続して OK かどうかの判断材料になります)

メスの白色オウムはほとんどが喜んで羽繕いを受け入れてくれたり、自ら頭を下げた飼い主にまわりついて「カキカキして、カキカキして！」と要求をすることもよくあります。発情行動に発展しない限りはその要求に応じてあげても問題ありません。もし、発情モードになったら、鳥の注意を他にそらす必要があります。止まり木にとまらせて歌やダンスをするなど、鳥が楽しくなることです。私のメスのオオバタンは頭をカキカキしてもらいたがりますが、これと同じくらい、止まり木で活動的な遊びをするのも楽しいようです。一年の中では、私たちが鳥部屋に入ったり鳥と視線が合ったりすると、鳥が発情の仕草を見せる時期があります。この場合、鳥に触れることは発情を促進させることになるので止めた方がいいでしょう。この時期はたいてい1週間から2週間ほどでピークに達します。この時期のほとんどの時間において止まり木で独立した遊びを促すようにしてあげてください。時々、時間を定めずに接することでもいいでしょう。時間をマチマチにすることで環境を変えることになります。

ハグや抱っこ、撫でる行為は、短い時間であり濃厚でなければ問題ありません。私たちが友達に会った時にするような素早いフレンドリーな感じのハグです。ほとんどの場合、とても長い時間ハグし合ったりはしないでしょう。短いハグは鳥にとっても有効です。

ハグしたり撫でまわしたり、抱っこしたりすることに代わって、他の方法でより満足のいく関係を構築することができます。いないいないばあ(peek-a-boo:ピーカブー)のようなゲームを一緒にやることです。手で人の顔を覆って突然現れます。追っかけっこは、「つかまえちゃうぞ」と言いながら手で鳥を追いかけて、鳥が捕まったら素早くハグするか、「いいコね」と声を掛けます。大き目の紙を軽く丸めたものをキャッチしてやさしく空中に浮かせたりする遊びは、数回飼い主さんが試した後に鳥にキャッチしてもらい、引き裂いたり、飼い主さんに投げ返してもらいます。ポジティブレインフォースメント(正の強化)トレーニングも楽しいでしょう!! ターゲットやターンを学んでももらったり、足を高く上げてバイバイしたり、ロープをよじ登ったり、小さなバケツを止まり木の位置まで引き上げたりなどなど。キャリアケースに自ら入ったり、爪のお手入れのために足を持ち上げてそのままキープしたり、ハズバンドリートレーニングを教えることもできます。鳥たちが学べるハズバンドリート行動はいくつかあり、私たちにとってもメリットがありますし、鳥にとっても楽しいものです。そして、鳥と一緒に笑ったり、歌ったり、踊ったりなど、もちろん滑稽なものもある

ります。

咬みつき、過剰な雄叫び、毛引き、産卵過多、総排泄腔脱のように、誤った接し方によってしばしばこれらの行動に発展させてしまうかもしれない抱っこや撫で回すという人の行動よりも、あなたが知っているよりもはるかに多くのはてあげられることがあります。(主に白色オウムにおいて)

一般的に、白色オウム以外の鳥は誤った扱いを受け入れてくれない場合もありますが、白色オウムは私たちからの行為を受け入れて、悲しいことに不適応な行為に発展してしまう場合もあります。下のイラストのピンク部分は、触ったり撫でたりしても、結果的に問題に発展することがなかった部分です。触るべきでないタイミングとは、鳥が触れられることを受け入れてくれない時や発情の仕草を見せる時です。ほとんどの白色オウムにとって喜んでくれて安全な部位は冠羽の下にあたる頭の上で、タイハクオウム、オオバタンでいうならば羽根がない部分になります。

